

欧陽修の詩

佐藤 保

一

欧陽修（一〇〇七—一〇七二）の門下生であった蘇軾は、欧陽修の死から十余年をへた元祐六年（一〇九二）、師のこした「七百六十六篇」の詩文を欧陽修の三男棐の^はところから入手すると、それらを整理して次のように師の業績を讃えた。

欧陽子は、大道を論じて韓愈の^{ごと}似く、事を論じて陸贄の似く、事を記して司馬遷の似く、詩賦は李白の似し。此れ子が言に非ざるなり、天下の言なり。

この文章は、元来はいま『欧陽文忠公文集』一五三卷附録五卷に収める「居士集」五〇卷の「序」⁽¹⁾の一節であるが、きわめて簡潔な表現の中に、唐の韓愈の忠実な後継者として儒家理念を根底におき、政治・史学そして文学の各分野で指導的な役割をはたした師の欧陽修の活動の多面性とその成就のすべてが、要領よく総括されている。

欧陽修に対しては、蘇軾のそれと趣旨を同じくする評価が、たとえば『欧陽文忠公文集』（以下『文集』と略記）の附録に集められた同時代の諸家の祭文・行状・墓誌銘・神道碑・史伝（葉濤の「重修神宗実録本伝」のほか）等にもしばしば見え、上掲のごとき評価が蘇軾のいう「天下の言」であることを裏づけている。しかし、それらはおおむね、古文運動に

おける欧陽修の功績を中心に、併せて政治と史学における評価を述べたもので、蘇軾が指摘するようなかれの詩賦への言及は必ずしも多くない。そうではあるけれども、この事実だけから、欧陽修の詩賦が当時の人びとから不当に無視されている、というつもりは、毛頭ない。

なぜならば、『文集』一五三巻中、古今体の「詩」に配当されている巻数は、「居士集」巻一―巻十四・「居士外集」巻一―巻七の二二巻、詩篇数は上記以外の巻に散見する作品を加えても計八八六首⁽²⁾であり、「賦」にいたっては僅かに九首が、「居士集」巻十五と「居士外集」巻八の二巻にそれぞれほかの作品とともに収められているにすぎない。ついでに「詞」にもふれておけば、「近体楽府」三巻中に一八一首を載せるだけである。⁽³⁾これらの詩賦詞の作品数を少ないと見るか、はたまた相当の数にのぼると見るかは、見方によって当然意見の分かれるところであろうが、少なくとも『文集』に集められた歴大な「文」の作品量に比べれば、欧陽修においては「韻文」の分野の活動が、相対的に少なかった、ということではできらるであろう。同時代の人びとのかれの詩賦への言及が必ずしも多くない理由の一つが、ここにある。言うまでもなく、かれの詩賦がさほど人びとの注意をひかなかった理由は、ただ単に作品の量的な点にあっただけでは、むろんない。むしろより重要なことがらとして、詩賦に向けられた欧陽修自身の関心とエネルギー、そしてその結果のみ出された作品の内容の問題——つまりは量的な問題よりも質的なそれ——が、存在していたからである。

端的に言えば、欧陽修が「詩」(詩賦詞を包括するものとして)をどう考え、どう作っているか、という点を考察するのがこの小論の目的であるが、欧陽修の作品を直接検討する前にもうしばらく蘇軾の評価にこだわっておきたい。

二

まずは、欧陽修の詩賦を李白に擬えることが、はたして蘇軾のいうように当時の「天下の言」であったか否かの問題

である。これを確かめるのは、容易なことではない。いまだに確固たる証拠を探し出せないでいるが、しかし、ほかにこれと似た評価がないわけではない。たとえば、蘇軾のときよりはだいたい後の南宋末に、羅大経が楊長孺（号は東山、楊万里の子）の言葉として次のようなことを書きとめている。

如^{たと}えば詩を作りて、便^{ほん}ち幾^{ほん}と李・杜に及ぶ。碑・銘・記・序を作りて、便^{ほん}ち韓退之に滅ぜず。『五代史記』を作りて、便^{ほん}ち司馬子長と並び駕^うく。四六を作りて、便^{ほん}ち一たび崑体を洗いて、円活にして理致有り。『詩本義』を作りて、便^{ほん}ち能く毛・鄭の未だ到らざる所を發明す。奏議を作りて、便^{ほん}ち陸宣公に庶^ち幾^かし。遊^{あそ}び戯れて小詞を作ると雖も、亦た唐人の『花間集』に愧ずる無し。蓋し文章の全きを得たる者なり。

蘇軾以上にこまかく欧陽修の文筆活動のすべてを語りながら、大筋では蘇軾の語とよく重なり合う。右の文中の「『五代史記』を作りて」が蘇軾のいう「事を記して」に相当すること、および「奏議」のくだりが同じく「事を論じて」と同一の内容をいうことは明らかであり、両者とも比擬する人物は、それぞれ、同じ司馬遷（子長）と陸贄（宣公）である。

この文章は、『鶴林玉露』丙編卷二・「文章有体」（文章に体有り）の条に見えるもので、楊長孺から羅大経が直接聞いた言葉とされている。引用部分に先だつ個所には、欧陽修が「一代の文章の冠冕」と尊ばれるゆえんが、かれの文章の「温純雅正」の味わいと、「仁人の言」「治世の音」を発したこととにより、また文章の書かれた事からの一つひとつがしかるべき「体」に合致していたからだ、と述べている。そのあとに、上掲の文がつづく。

「仁人の言」「治世の音」を発することは、これまた儒家の人びとが理想と仰ぐ行為にほかならず、しかも韓愈を論評するときにはしばしば用いられる言葉でもある。たとえば、王安石は韓愈を孟子・荀子・揚雄と並ぶ「古えの有道の仁人」（「原性」⁴）のひとりに数え、石介は韓愈の文に「洋洋たり治世の音、磊磊たり王化の基」（「韓文を読む」⁵）を認めて

いる。これらの例からするならば、楊長孺の語は歐陽修の活動の根底に韓愈と同じ儒家の道があったと説いているに等しく、蘇軾のいう「大道を論じて韓愈の似く」と、ほぼ同じことをいっていると考えてよい。ただ明らかでないのは、詩（詩賦）について一方が李白だけをあげているのに、他方では李白にさらに杜甫が加えられている点である。

韓愈が唐代における——ということとは、李杜に最も近い時期の——李杜の熱烈な尊崇者であったことは、すでによく知られている。「李杜 文章在り、光燄 万丈長し」（張籍を調ける⁽⁶⁾）をはじめ、李杜を讚美するかれの詩文の今にこのものは少なくない。あるいは、この韓愈の李杜に対する讚美が、蘇・楊ふたりの歐陽修評価のもとにあるのかもしれない。むしろ、ふたりともそのことは十分承知していた、と考えるべきであろう。そうだとすると、それにもかかわらず蘇軾が李白だけをとりあげたのには、そこになにか特別の意味をもたせているのであろうし、楊長孺はいわば、韓愈、そして韓愈の学統をつぐ歐陽修たちが尊んだ偉大な詩人として、李杜のふたりをもち出したにすぎないのかもしれない。楊長孺の言葉は、具体的な詩の傾向をいうというよりも、中国の詩の到達すべき高い境地を概念的にさしているもののように、わたしには思える。いささか社交辞令めいたほめ言葉、ととらえたいのである。

三

蘇軾の言葉は、かれほどの人の言葉だから、単なる社交辞令でない、と判断したいのである。

欧公の詩、主とする所、単に一韓に在り。太白・少陵は、並に未だ敢て染指せざる所、偶ま一たび之に例へば、則ち蹶跌を免かれず。

森槐南のこの発言は、後文でふれる逸話⁽⁷⁾に関してなされたものであるが、槐南によれば、歐陽修の詩と李杜の詩には全く關係がない、ということになる。この意見がいささか極論にすぎることには追いおい述べることにして、次にあげる

近人の施培毅の指摘は、きわめて公正なものであろう。

欧陽修の詩には、李白の影響が存在する。だが、欧詩の成果は明らかにまだ李白と同列に論ずることはできず、さらにまた全体的に見て、李詩は奇麗、欧詩は清淡で、両者の間に似ている点ははなはだ少ない。

施培毅は、基本的には蘇軾のほめすぎと考えているのである。これらの否定的な意見とは反対に、わたしと同じように蘇軾の真意を積極的にさぐるうとする人が、いなかったわけではない。南宋の陳善が『捫虱新話』⁽⁹⁾でいうには、

欧陽公の文字は興を寓して高遠、多くは風月閑適の語を為るを喜ぶ。蓋し太白に效いて之を為すなり、故に東坡は欧公集の序を作りて亦た「詩賦は李白の似し」と云う。

と、「興を寓して高遠」のびのびとした作詩の態度が、欧・李共通のところだと、いつているのである。われわれは陳善のこの指摘を、具体性のある詩評として、記憶しておかなければならない。

上文で韓愈と李杜との関係にふれ、その伝統の中に欧陽修もいたにちがいないことを述べたが、欧陽修と李杜とのふかい関係を示す資料が、二つある。その第一は、宋の葉夢得の『石林詩話』が伝える裴が語った欧陽修の逸話であり、第二は欧陽修自身の筆記文献である。

まず逸話の方から紹介すれば、かれみずから自作の「廬山は高し」(廬山高)一篇と「明妃曲、王介甫に和す」(明妃曲和王介甫)二篇を、李白と杜甫とをひきあいに出して、大いに自慢した話である。すなわち、「廬山は高し」は自分のほか李白だけが作れる作品で、「明妃曲」後篇は李白も作れず杜甫だけが作れるし、前篇は杜甫さえ作れない、というのである。『石林詩話』のほか、宋人の詩話類のいくつかに載せられている、よく知られた話ではあるが、欧陽修の真意かどうかについてはいささか疑いを禁じえない。⁽¹⁰⁾ なぜならば、『文集』に収録されている詩篇の中に、明らかにこの三篇よりすぐれた作品がいくつもあり、それを理解できない欧陽修ではなかったはずであるから。上掲の森槐南の語は、こ

の逸話に対するコメントであった。しかしながら、一見、荒唐無稽に見える話にもいくらかの真実味があるか、逸話がうまれたり語り伝えられたりするなにかの理由があるだろう。その理由と考えられるのが、第二の資料である。

『文集』収録の「筆説」一卷は、弟子の蘇轍がかれの家にあった欧陽修の書きものをまとめたものである。末尾に、蘇轍の元豊二年（一〇七九）正月の題記をもつが、その中に「李白杜甫詩優劣説」という一文があり、欧陽修は、李白の「襄陽歌」の数句をひいて李白詩の特色である「横放」（奔放さ）を述べながら、杜甫が李白を凌駕するのは「精強」（精密な表現を駆使してのつよさ）という面だけで、李白の「天才自放」（天才をもちみずからをとき放つ）点においては、杜甫はとうてい及ぶべくもない、と論じている。後世の李杜優劣論の嚆矢となったこの一文からは、総体的に李白の方が杜甫よりも優れている、と説いているように見える。たしかに、「居士集」巻五に載せる「太白もて聖俞に戯る」（太白戯聖俞）を見ると、李白の詩の自由なスタイルと奔放の趣きを、かれがこよなく愛していたことは理解できる。前の「廬山は高し」に関する話にいくばくかの真実味があるとすれば、やはりその作品の奔放・自由なスタイルと内容にかかっているものではないか。この「優劣説」では、李白の「横放」「天才自放」を説くことに重点があるのであり、それらは、前述の陳善（『捫虱新語』）の「興を寓して高遠」と、きわめて近似する概念をもつのではないだろうか。そうだとすれば、蘇軾が師の詩を李白に比擬したのは師の考えを拳拳服膺したことにもなる。このことも重要なことながらとして、記憶されなければならない。

一方、杜甫についても、学ぶべき優れた先人として、欧陽修は並々ならぬ尊崇の思いを表明している。たとえば、「居士外集」巻四の「堂中の画像に題を探りて、杜子美を得たり」（堂中画像探題得杜子美）と題する五言古体の短詩を読めば、そのことは明らかであろう。

風雅久寂寞 風雅 久しく寂寞

吾思見其人 吾れ其の人に見えんことを思ふ

杜君詩之豪 杜君は詩の豪

來者孰比倫 來者 孰れか比倫せん

生爲一身窮 生きては一身の窮を爲し

死也萬世珍 死するや 万世の珍となる

言苟可垂後 言 苟も後に垂るべくんば

士無羞賤貧 士は賤貧を羞ずる無からん

杜甫のよき理解者のひとり、というべきか。

四

ここで少し論点をかえて、李杜のいずれが優れているかという優劣論の内容でなく、歐陽修がなぜこのような比較を試みたのか、その背景となる事柄について、ひとこと述べておきたい。

なぜこの問題が重要かといえば、後文で述べるように、歐陽修以前の宋代初期の人びとは、ほかの唐詩人への関心に比べて、李杜への関心がうすかったように見えるからである。近人の黄啓方が指摘するように、⁽¹¹⁾宋初においては杜甫に對する関心が、李白に比べて一層少なかったという状況が真実だとすると、歐陽修がほかの人びとに先んじていち早く杜甫に眼を向けたそのことが、はなはだ重要な意味をもつであろう。当時の李杜それぞれに對する一般の関心の度合を測定することはきわめて難しいが、考えうる一つの手がかりとして、両者の詩文集の編纂・刊行の状況を見てみよう。

李白の集は、たしかに比較的早い時期から編纂が進められていた。すなわち、咸平元年（九九八）に史官の樂史が『李

翰林集』三〇巻を編み、さらに欧陽修とほぼ同じころの宋敏求と曾鞏が樂史本の増補・整理をして、やがて元豊三年（一〇八〇）に刊行された。⁽¹²⁾ それに対して杜甫の集の編纂作業は遅れて、宝元二年（一〇三九）にようやく王洙によって『杜工部集』二〇巻がまとまったのである。しかし、刊行は宋・曾等の李白集よりは早く、嘉祐四年（一〇五九）のことであった。⁽¹³⁾ 王洙本の刊行は欧陽修がまだ在世していたときであり、編者の王洙はその二年前に歿しているが、王洙の墓誌銘を書いたのは、ほかならぬ欧陽修である。また、李白集の整理をつづけていた曾鞏は、かれの古文運動の同志でもあった。これらのことを考え合わせると、かれの「李白杜甫詩優劣説」執筆の背景には、宋代中期以降の文人社会に、李杜の詩がしだいに浸透し、広がっていくという状況があり、あるいはそれが執筆の一つの契機となっているのかもしれない。「筆説」もやはり、「帰田録」（治平四年一〇六七）や「詩話」（熙寧四年一〇七一から翌年にかけて）と同じく、かれの晩年の隨筆と推定されるので、李杜両集の編纂の動きは当然、知りえていたにちがいない。この観点からもう一度「廬山は高し」の逸話をふりかえれば、「廬山は高し」が皇祐三年（一〇五一）の作、「明妃曲」二首が王洙本刊行の嘉祐四年の作である。従って、欧陽修の自慢話は当然、早くても嘉祐四年以降ということになるし、これまた李杜集編纂の動き、とりわけ杜甫集の刊行となんらかの関係があると考えても、時間的な矛盾はない。

四

さて、欧陽修自身の詩作活動を検討する段階となった。

いま『文集』に採録されているかれの詩作品で、最も早期に属するのは、天聖九年（一〇三二）、かれが数え年の二十五歳のときに作られた作品である。その前年に文人官僚として名高い晏殊のとりしきった科挙の試験に首席で合格し、ついで崇政殿における天子の面前の殿試にも及第（甲科第十四名）、この年の春三月、西京（洛陽）に留守推官の役を仰せ

つかつて赴任した。かれの官僚生活の第一歩である。

このとき、洛陽には数多くの文人、詩人が集っていて、それまでの中晩唐詩愛好の空気とはちがった新しい文学の動きが始まっていた。若い欧陽修が早くにこのような空気にふれ、そしてまた生涯の知友をたくさん得たことは、もちろんかれにとっても、またその後の宋代の文学にとっても、たいへん幸せなことであった。

景祐元年（一〇三四）の初め、かれは、西京留守推官の任期がおわる直前に、すでに西京を離れて地方官生活を送っていた五歳年長の梅堯臣（聖俞）に、西京での人びととの交友をうたう一首を書き送った。「懐いを書いて事に感じて、梅聖俞に寄す」（書慎感事寄梅聖俞）と題する作品で、「居士外集」巻二に収める。詩にうたわれている人は、かれ自身を除いて十人、つぎの人びとである。

大尹・相公（錢維演、九六二—一〇三四） 希深（謝絳、九九四—一〇三九） 師魯（尹洙、一〇〇一—一〇四七）
子漸（尹源、九九六—一〇四五） 彦国（富弼、一〇〇四—一〇八三） 幾道（王復、？—？） 子聰（楊子聰、
？—？） 子野（張先¹⁴、九九二—一〇三九） 次公（孫延仲、？—？） 聖俞（梅堯臣、一〇〇二—一〇六〇）

幾人か生卒年のわからない人もいるが、おおむね欧陽修よりは年長である。これらの人びとの中で、特に重要な人は、尹洙（師魯）と梅堯臣（聖俞）のふたりであり、尹洙は古文の大家としてかれが尊敬し、梅堯臣は詩の面でかれに大きな影響を与えたことは、すでに文学史の定論となっていて、いまさらくりかえすまでもなからう。ここには出てこないが、この「懐いを書いて事に感ず」詩を作ったすぐあとくらいに交際がはじまったと推定される蘇舜欽（子美、一〇〇八—一〇四八）をここに加えれば、景祐年間における新しい詩人がグループが浮かびあがってくる。

後年、至和二年（一〇五五）、梅堯臣はこのころの欧陽修を中心とする新しい詩界革新を回顧して、つぎのようにうたった。「韻に依りて永叔の澄心堂紙もて劉原甫に答うるに和す」（依韻和永叔澄心堂紙答劉原甫）という長い題の作品である。

退之昔負天下才 退之は昔 天下の才を負い

掃掩衆説猶除埃 衆説を掃掩して猶お埃を除くがごとし

張籍廬仝鬪新怪 張籍 廬仝は新怪を鬪わし

最稱東野爲奇瑰 最も東野を称えて奇瑰と爲す

當時辭人固不少 當時 辭人 固より少なからず

漫費紙札磨松煤 漫りに紙札を費し 松煤を磨す

歐陽今與韓相似 歐陽は今 韓と相似し

海水浩浩山鬼嵬 海水浩浩 山は鬼嵬

石君蘇君比廬籍 石君蘇君 廬籍に比す

以我擬郊嗟困摧 我を以て郊に擬し 困摧を嗟く

公之此心實扶助 公の此の心 実に扶助

更後有力誰論哉 更に後に力有り 誰か論ぜんや

この詩の中でうたわれている石延年(曼卿)の死が康定二年(一〇四二)、さらに蘇舜欽の死はそれに遅れること七年の慶曆八年(一〇四八)であったが、ここでうたわれている事実はこの「慶曆の新政」でかれら一党の人びとが政治革新に燃える前の、洛陽で互いに切嗟琢磨しながら若い一時期を過したときのことを詠じているのは、明らかである。自分たちのグループをかつての韓門の人びとに擬えることは、かえって歐陽修の作品の中にはあまり見出せないが、梅堯臣にはほかに、いくつか同じような作品がある。このような同志的グループを結んで宋代初期の詩風の革新に動き出した詩人たちの中心に歐陽修は位置していたのであるが、そのことについては稿を改めなければならない。そしてその

検討の中で、さきの蘇軾の評価が再び検討されることになる。(未完)

註

(1) いま『歐陽文忠公文集』の巻頭に、「居士集序」として付されている。蘇軾の文集『經進東坡文集事略』巻五十六にも、「六一居士集敘」と題して収めるが、『文集』の「序」の末尾に見える「元祐六年六月十五日敘」の文字は、『文集事略』には見えない。

なお、本文中に示した「七百六十六篇」の数について付記するならば、現行の「居士集」には、詩文あわせて七六八篇ある。蘇軾が見た後に改訂の手が加えられたためである。

(2) 「居士集」の巻一―巻十四に五二二首、同巻十五の「雜文」に四首、「居士外集」巻一―巻七に三四九首、同巻八の「辭」に二首、同巻二十四の「近体賦」(実は詩)に三首、さらに「近体楽府」巻一冒頭の詞とみなしにくい作品六首を合計すると、八八六首となる。

(3) 詞は、『文集』に収める「近体楽府」のほかに、『醉翁琴趣外篇』六巻が存在する。同書の内容について従来とかくの議論があるが、それを歐陽修の作品集と見ることについては、田中謙二「歐陽修の詞について」『東方学』第七輯、一九五三・一〇〇)を参照。同論文の指摘によれば、「近体楽府」と重複しない作品数は七三首。また、唐圭璋編『全宋詞』(一九六五・六、中華書局)は、『醉翁琴趣外篇』のみならず、そのほかからの採集も加えて、二六七首を歐陽修の詞作品とする。

(4) 『臨川先生文集』巻六十八。

(5) 『徂徠石先生全集』巻二。

(6) 『昌黎先生文集』巻四。

(7) 『森槐南遺稿 中国詩学概説』(神田喜一郎編、一九八二・一二、臨川書店)の「宋詩学」の章。

(8) 施培毅選注『歐陽修詩選』(一九八二・三、安徽人民出版社)の「前言」。

(9) 筆記小説大観四編本巻二、「王荊公論李杜韓歐四家詩」。

(10) 「廬山は高し」以下三篇の作品は、すべて(そしてそれらだけが)『古文真宝』前集に採られている。わたしが友人の和泉新君と訳注を施した学研版中国の古典二六『古文真宝』(一九八四・六)には、三篇の作品の訳注のほか、この逸話の出処などが記してある。参照されたい。

(11) 黄啓方編輯『北宋文学批評資料彙編』(中国文学批評資料彙編之三、一九七八・九、台北成文出版社)の「緒論」参・詩論、五・批評論、(二)論李白杜甫の項参照。なお、同書の本文に関連資料を多数収める。

また、この点に関しては、華文軒編『古典文学研究資料彙編 杜甫卷』上編・唐宋之部第一冊(一九六四・八、中華書局)、あるいは、瞿蛻園・朱金城校注『李白集校注』(一九八〇・七、上海古籍出版社)第四冊の「附録」に集められている序跋・詩文・叢説類を比較すると、ほぼ黄啓方の指摘のような事実が認められるが、待考。

(12) 李白集の編纂と刊行については、京都大学人文科学研究所刊・唐代研究のしおり第九『李白の作品 資料』の平岡武夫「李白の作品序説」李太白文集の構成と系譜の項、参照。

(13) 中華書局刊『杜甫研究論文集』三輯(一九六三・九)に見える「杜甫詩集の幾種較早刻本」(叔英)を参照。

(14) この張先は、欧陽修と科挙に同年で合格した詞人の張先ではない。詞人張先は九九〇―一〇七八。夏承燾著『唐宋詞人年譜』(一九五五・一一、上海古典文学出版社)所収の「張子野年譜」によれば、詞人張先が欧陽修にあうのは、嘉祐六年(一〇六一)のことである。

本稿は、伊藤漱平氏を研究代表者とする昭和五七年度科学研究費補助金総合研究(A)「中国における文芸思想の総合的研究」の宋詩部門における研究成果の一部である。